

妹



小中沢小夜子・作 高田三郎・画

妹

小中沢小夜子



妹

現代・創作児童文学

1980年2月／発行◎

著者／小中沢小夜子

発行所／株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3
電話／東京03-861-1861（代表）
振替／東京0-64678

印刷・製本／K・M・S

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

913 小中沢小夜子

妹

金の星社 1980

223p 22cm（現代・創作児童文学）

基本カード記載例

8393-042181-1406

も
く
じ



第一章

- 満州^{まんしゅう}への長い道 9
- (一) 旅立ち^{たびだち} 10
- (二) 開拓地^{かいたくち}に着く 24
- (三) 弟英和^{ひさかず}の死 33
- (四) 妹美代子^{みよこ}の誕生^{たんじょう} 46
- (五) 兵隊^{へいたい}がくる 59
- (六) 黄色い砂^{きいろすな}あらし 67



第二章

動乱どうらんのなかで 77

(一) にげまどう開拓民かいとくみんたち 78

(二) ハルピンの難民なんみん收容所しゅうじょじょ 88

(三) もらわれていった妹 97

(四) 中国人の養女ようじょになつて 112

(五) 引き揚げ列車れつしや 128

(六) 帰りついた日本 142

第三章

妹の声が聞こえる 155

(一) 妹へのつゝのる思い 156

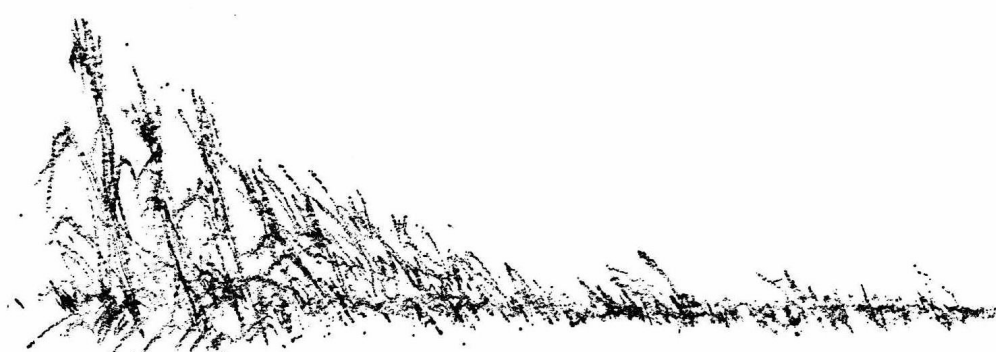
(二) きつと生きている…… 165

(三) 手がかりを求めて 177

(四) 妹からの手紙 192

(五) 再会さいかいを胸むねに 209

解説——「愛の讃歌」 早乙女勝元 220



作者・画家紹介

小中沢小夜子 (こなかざわ さよこ)

1933年，山梨県甲府市に生まれる。8歳の時，一家で満州へ移住。46年，日本の敗戦により引き揚げ。76年，サンケイ新聞主催「にっぽんのお母さん」に選ばれる。77年、『樹海』第二同人となり，78年度樹海賞受賞。四児の母親。

高田三郎 (たかた さぶろう)

1941年，北海道に生まれる。神奈川大学工学部卒業。地方公務員を勤めた後，現在，フリーとなって絵に専念している。おもな作品に『故郷』などがある。

妹

小中沢小夜子

金の星社



大豆畑は、青い葉でこんもりとしたうねをつくり、さえぎるものもなく、長く長く地平線までつづいている。その畑の中で、二歳の妹の美代子が、一頭の馬と遊んでいる。ときどき妹はつまずいて、うねの間で両手をついた。すぐに起きあがり、馬に近づき、小さな手の中のものもろこしを、馬の鼻先にさしだして言った。

「お馬ちゃん、もろこしあげるね。」

馬はわずかに口をひらき、とうもろこしを受ける。美代子は、目をかがやかせていっしょに口をひらきながら、馬を見あげた。

「おいしい？」

と、首をかしげながら聞く。馬はとうもろこしを、もう一度くわえ直してから食べた。

「お馬ちゃん、もっとあげようね。」

畑のすみに置いてある、おやつのもろこしを取りにいく美代子は、だぶだぶの姉たちのおさがりのもんべに、ぶかぶかの長ぐつをはいているので、畑の中をうまく歩くことができない。

馬は尾を左右に、二、三回ふって、胴にまつわる虫を追った。それから、とろっと目を細めて美代子を見ている。



おさがりであるブラウスの袖を、おりあげて、その袖からのぞいている小さな腕は、白くてぼつちやりとまるくくびれている。広い大豆畑には、とてもにあったスタイルである。

「お馬ちゃん、こっちにおいで。」

歩くのがめんどろになったのか、美代子は畑の中にすわりこんでしまったまま馬をよんでいる。

馬は向きを変え、ゆっくりした足どりで美代子のところに来て、頭を下げ、美代子に近づいた。美代子が、その馬の口もとに両手をのばしてすがりつくと、馬は、「くすぐりたいね……。」というようなそぶりをして顔をひく。

美代子は立ちあがって、よちよちと歩きだした。ころんでは立ちあがり、地平線のほうに向かつて歩いていく。馬もそのあとを、ゆっくりした足どりでついていく。大豆畑は夕日に赤くそまった。美代子と馬の姿が小さくなっていく。

「美代子ーっ。どこにいくの。もどっておいで。」

と、わたしはよんだ。だが、美代子には聞こえない。

「美代子ーっ。お家に帰ろう。早くもどっておいでー。そんなに遠くにいくと帰れなくなるでしょう。」



大きな声でさけぶと、美代子^{みよこ}がふりかえった。馬も立ちどまった。美代子の小さな顔が夕日にそまって美しい。まるい顔をさらにまるくして、にっこりわらうと、また、よちよち歩いていく。ついに地平線^{ちへいせん}に見えなくなってしまった。

「美代子ーっ。どこにいくのーっ。」

声をふりしぼってわたしがよぶと、美代子の声が空にぶつかってひびいてくるように聞こえてきた。

「ちやあちゃん（お母さんのこと）のところにいくの——。」

わたしは美代子を追って走ろうとするのだが、足が動かない。どうしても動かない。

「美代子ーっ。美代子ーっ。」

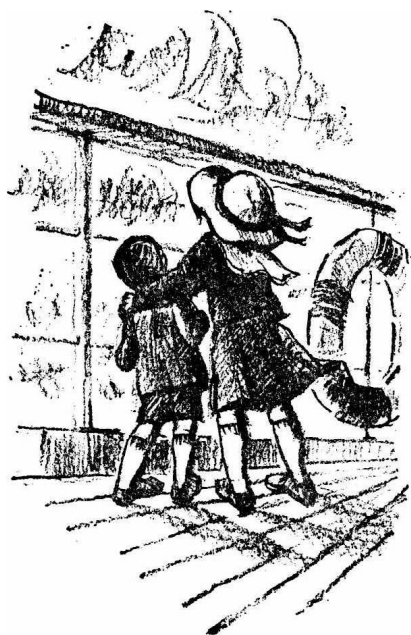
と、さけぶ自分の声で目がさめた。夢^{ゆめ}だった。体^{からだ}じゆうがあせばんでいた。足が、かたくつばって、まだ夢のつづきのようだ。

「夢だったのか。」

つぶやきながら、わたしは枕元^{まくらもと}の電気スタンドをつけた。夢の中に出てきた小さな美代子と中国でわかれてしまってから、すでに三十三年がすぎた。美代子は、中国でぶじ生きてくれているだろうか。

第一章

満州^{まんしゅう}への長い道



(一) 旅立ち

わたしたち一家は、山梨県甲府市飯田町に住んでいた。父と母、姉の和子、わたし、弟の英和、妹の須賀子の六人家族だった。

父は、いつも笑顔をわすれないおだやかな人だった。手先が器用で、わたしたち子どもに、いろいろな料理をつくってくれた。

桃の節句（三月三日のひな祭り）には、前日から母に買い出しや下準備をさせておき、重箱に美しい色どりの料理をつめてくれた。蓮根（はす）は矢羽根形に切り、ゆで卵は菊の花の形に切った。そして、うす紅色にそめたの白いのをならべて紅白の菊に見せ、緑色のようなかんを葉の形に切って、そえてあった。にんじんは、百合の花の形にし、ごぼうの舟には豆とつまようじでつくった船頭さんがのっていた。

父は一つの重箱ができあがると、

「はいよ、お母さん、これは須賀子のだ。」

と母に手わたす。母はすべて心得こころえていて、

「はい。小さい人から順番じゅんばんですね。お父さん。」

といって、名前を書いた色紙を重箱にはさんで、おひな様さまの前にならべる。わたしも、姉あねの和子かずこも、妹の須賀子も、父の指先の動きをじつと見つめていて、父のまわりをはなれない。母は見かねてこういった。

「お父さんのじやまになるから、ちよつと外で遊んでおいで。ぜんぶできあがったら、よぶからね。」
それでも、わたしたち姉妹し妹は、生つばをのみこみながら、そこを動かなかつた。

「さあ、できたぞ。おわざつと遊びあそびにいいで。」

父の言葉ことばにとびつくようにして重箱を受けとり、近所の友だちともの家に向かつて、一目散いちもくさんにかけだすのだった。

おわざつと遊びというのは、重箱のふたに少しずつごちそうをのせて「おわざつと（ありがとう）。」
といいながら、料理りょうりを友だちと交換こうかんする、桃ももの節句せつくに行われた山梨県やまなしけんのわらべ遊びだった。

小川の岸辺きしべや、草原で、友だちとごちそうを交換しながら食べて、重箱がからになると、急いで家に帰る。父は、ちゃんと追加ついかの料理りょうりを用意よういしておいてくれたものだった。

しかし、このような楽しいくらは長くはつづかなかつた。



昭和十六年の春、父はそれまでつづけていた牛乳屋をやめて、家じゆうで満州国（満州は中国の東北地方の古い地名。一九三二年から一九四五年まで、日本軍が満州国をつくり、支配した）に移住する決心をした。

家業が思わしくなかったときであり、商売で出入りをしていた県庁で、開拓団へのさそいを受けたからだ。広大な土地の地主になれるという宣伝ビラに、父の夢もふくらんだ。

わたしたち家族が参加することになったのは、山梨県で送りだした第八次帽児山山梨開拓団である。すでに昭和十四年から、先遣隊の人たちが、満州国濱江省の広い土地に移住して、開拓団の基礎をつくっていた。そこにわたしたちは、追加入植をするのである。

県庁からいろいろの話を聞いてきた父は、夕食のとき、母やわたしたちに、これからいく満州のこゝとや、そのための準備などについて話した。

「満州はとても寒い土地だよ。一度ふった雪は春までとけない。春になって雪がとけると、急に暑くなって、日本の春のようなよい季節はなく、すぐ夏になってしまうそうだ。土地も広いよ。原野の終わりは空につづいているように見える。夕日はまっ赤で、とても大きな太陽だそうだ。」

子どもたちもみんな、はしを動かすのもわすれて聞きいった。わたしたちが父の話にむちゆうになつて身をのりだすので、まるいちゃぶ台がぎしぎしときしんだ。

「ほらほら、そんなにのりだすと汁がこぼれるわよ。」

母は茶わんを中央によせながら、わたしたちに注意をする。

「こんなに耳の長いロバがな、こんなふうにくさくさをして、石臼をひきながら同じ場所をぐるぐると回るのだ。一日じゅう歩きつづけながら、とうもろこしの粉をつくるんだそうだ。」

父は、はしを頭の上に立ててみせながら、片手で自分の目をおおって、くさくさのまねをした。姉は不思議そうに考えこんで、

「目が回らないのかしら。一日じゅう石臼のまわりを回っていても……。」

「ふった雪がとけなければ、ひと冬の間ではたいへんな雪がつもってしまうだろうに……。」などという。わたしは、

「春がなければ、おひな祭りができないね。」

と、まじめに心配をして、父母や姉にわらわれた。子どもながらも、これからいく満州という国のことをあれこれと考えて、へ早くいきたいなあ。と胸をおどらせた。

そのとき、今まで身ぶり手ぶりでおもしろく満州の話をしてくれていた父が、急にまじめな顔になって、わたしたちを見まわしながら、話をつづけた。

「お父さんのように商人だった者や、工場ではたらいっていた人、農業をしていた人や、つとめ人などが、いっしょに満州の開拓地で生活することになる。みんなで力を合わせて土地をたがやしたり、学校や家を建てたりして、共同作業をするのだ。自分勝手なことはできない。そうして、その広い土